

# 短大留学生における文学教育の一つの試み

## — 短歌を教材として —

山 本 裕 一

A Study of Teaching Japanese Literature  
for a Student Studying Abroad in Junior College  
— Using TANKA as a Material —

Yuichi YAMAMOTO

### 【要 旨】

近年盛んに議論されている二つの問題、「文学の教育」と「留学生教育」の両方にまたがる問題として、留学生の文学教育について私見を述べる。現場の教育者として、また、長年文学研究に携わってきた文学研究者として、「現在の留学生に必要な文学教育とは何なのか」について考察し、その一つの試みとして、日本語教育の分野で行われている、「文学教材を使った学生主導型授業」を用いた実践を紹介し、提案する。

### 【キーワード】

留学生教育 文学教育 短歌

## 1. はじめに

文学教育の問題は古くて新しい問題である。この分野の研究には、数多くの著書と論文が存在している。以前よりずっと論争が続いており、近年も紙上で、また、シンポジウムで語り合われる機会が多くなっている。ここ1、2年の例をあげると、たとえば、2010～2011年の『日本文学』誌上では、「文学／教育のなかの〈こども〉」(59巻1号、2010. 1)、「文学教育の挑戦」(59巻3号、2010. 3)、「ポスト・ポストモダンと文学教育の課題」(60巻3号、2011. 3)などと特集を繰り返しており、また、

日本近代文学会においても継続的テーマとして、文学教育が設定された。

本年度、日本近代文学研究会春季大会は5月28日、29日に行われ、初日、第一会場にて継続テーマである「文学を教える——研究環境・研究方法の前線(三)」の研究発表があり、それを拝聴することができた。内容は次の3氏による発表とディスカッションであった。

「読みたかったのはこれじゃなーい!!」 跡上史郎  
「文学を勉強するって、どういうことですか？」  
島村 輝  
「崇高なもの」とのかかわりかた 助川幸逸郎

今ここにその詳細を述べる暇も紙面もないが、誤解を恐れず大雑把に要約を試みてみると、跡上氏のご発表は、氏の在住する地域の詩人を招き、詩人とその作品とを学生に提示することで、自分の考える「詩」との違和感を喚起し、それでは、自分の考える「詩」とは何か、と自ら考えるように導く試みであった。助川氏のご発表も、具体的な方法の提示がなかったものの、日常と違う「崇高なもの」との出会いによって学生の心を刺激するという試みであった。ともに座学を離れ、「体験」により、学生の自発的な思考活動を促す試みであり、大学・短大の文学教育に携わるものとして、これこそが自主性にかける現在の学生に対する「文学」教育の目指すべき方向性と、大きな示唆を受けた。島村氏の方法論は、従来のオーソドックスな方法をしっかり学ばせることで、応用力をつけていくものであり、文学部のように十分な時間をかけて文学教育が可能な環境で有効なものであると感じた。

また、グローバル化が進み、国際化が進む昨今、平成20年に文部科学省によって策定された「留学生30万人計画」に見られるように、留学生の招致とその教育は、国家的規模の教育課題となっている。この、留学生の教育の問題についても、近年、シンポジウムや学会などで盛んに話し合われており、専門書や研究論文が多数発表されている。

本年度6月には、そのうちの一つ、2011（平成23）年度第1回日本語教育学会研究集会（九州地区）の発表を、立命館アジア太平洋大学において拝聴する機会に恵まれた。特に近藤有美氏の発表「短歌で学ぶ日本語—韓国人大学生、韓国の中心で愛を叫ぶ—」には、留学生の日本語教育、文学教育に対しての大きな示唆をいくつもいただいた（後述）。

幸いなことに、私は現在「留学生の文学教育」という、前述の2つの大きな問題にまたがる仕事に従事している。そこで、短大留学生にとって必要な「文学教育」とは何かについて検討し、私見を述べるとともに、これらの発表や以下に

述べる参考文献をもとに本年度行った授業改良の試みについて述べていきたいと思う。

手順としては、短大における文学教育の現状とその目標について触れ、次に、本学留学生における文学教育の意義について考える。さらに、本学に在学する留学生の持つ文学や読書に対する意識について、アンケート調査の結果から考察し、最後に、それらを踏まえた授業の試みについて述べていく。

## 2. 短大における文学教育の目標について

まずはじめに、短大全体の問題について考えてみたい。前述のように、文学教育に関する著書、論文は枚挙に暇がない。しかし、事を短大に限ると、数は激減する。これは、短大の持つ特性——2年間という短期間に必要な数多くの科目を履修する必要があることから、単位数や時間数が制限されること——によって、カリキュラムが圧迫され、「文学」教育の位置づけがあいまいになっていることに起因するのだろう。見理文周氏<sup>1)</sup>は35年前の論文で次のように述べている。

短大における『文学教育』の取り扱い方は、各大学におけるカリキュラム編成の事情と、「文学」教科の担当者の見解や方法に任されているのが実情である。

残念ながら、この状況は今も変わらないように思われる。たとえば、私が所属する地域総合科学科では、ビジネス、観光等に中心をおき、さまざまな資格を取れるよう、カリキュラムが組まれている。近年、キャリア支援に重きを置き、専門学校には少ない教養科目を取り入れてきているが、「文学」の講義は開講されていない。

「文学」の講義がなくていい、または、カリキュラム上開講できないという程度の扱いで、体系的に教育的プログラムに組み込まれていないのが残念であるが、これは、「文学教育はそもそも（何のために）必要か」という問題を考え直すいい機会であろう。このことは、発展的には短大教育の目的や教育プログラムの見直し

にも係っていくと思われる。

さて、われわれは何を目標に文学教育を行うべきであろうか。この点でも、見理氏の意見は示唆に富むものである。氏は、文学や、学歴偏重に傾く当時の文学教育に関する大きな流れを踏まえたあと、現場経験者の立場から、以下のように結論を述べている。

短大保育科のための「文学教育」は単なる一般教養としての〈文学概論〉であってはならないと思う。通論的な文学史や、根本的な作品の鑑賞や興味のある作家の経歴調査などやったとて、何の意味もないだろう。

幼児教育者や保育者になる学生にとってもっとも大切なことは、〈人間〉への個別的／具体的な理解であり、その〈生命〉への愛着であり、その〈尊厳〉への自覚であるべきではないだろうか。そして「文学教育」の目的は、このことを、文学作品によって目覚めさせることにある、と考える。

これに続く部分で、氏は、「人間」理解のために「広い角度からこれを検討し、考察」するための一つ的手段として「文学」があり、文学作品を媒介としての自発的な「人間発見」をめざすべきで、他の科目と意識的に関連づけ、学生の興味や関心を喚起させる必要があると続けている。後半は特に個別に動きがちな大学教員として傾聴すべき意見であろう。

氏の論は短大保育科教員という現状を踏まえて、そこに限定してのものである。しかし、「人間」理解は教育者となる学生のみならず、短大生あるいは（留学生を含む）学生全体に共通すべき目標ではないだろうか。技術習得に特化した専門学校に対し、公開講座や教養科目を設置し、人間教育的側面を重視している短大が存続する意味とは、この「人間」理解という人格陶冶の機会としての意味が大きいのではないかと思われる。だとすれば、「人間」理解を可能とする「文学」が果たす役割は大きく、短大教育のプログラムの中に組み入れるべきだと思われる。

なお、見理氏の意見もまた、先に紹介した跡上、助川両氏の発表同様、学生の内発的な自覚を促すものであり、文学教育の方向性は、単なる知識の授受でなく、体験による「人間」理解にある、というのが今回紹介している研究者、教育者に共通している。しかし、跡上、助川両氏の発表は、学生が「文学を」学ぶための試みであり、対象の学生も文学に強い興味を持つ学生に限られる。また、異質なものと崇高なものとの出会いを常に持つことは個人の資質や人間関係、環境に依存する部分が大きく、安定的実現が難しい。短大の文学教育の目的を先のようなものと考えたら、両氏の論のように「文学を」考える前の段階として、異質なものと崇高なものを含むものとしての「文学で」学ぶこと、「人間」を考え、理解することが、短大では望まれることではあるまいか。

### 3. 留学生における文学教育の意義

#### (1) 留学生の文学軽視の傾向

私は、本学文学部国文学科で10年以上、留学生の文学教育に携わってきた。短大に異動した後も3年にわたり、大学・短大の文学教育を担当させていただいている。その間、私にはずっと違和感があった。それは、留学生がその学習において、文学研究を非常に軽視しているのではないか、という疑念である。

たとえば、文学部国文学科の教員であったとき、編入生にあなたはどんなことが研究したいですか、と質問する。すると、返ってくる答えは9割がた「日本語です」であり、それも敬語や助詞など、日本語の運用面に関するものである。「他には」といっても「日本語です」と答える。日本語を学ぶことを第一義に置くことは留学生としては当然のことかもしれないが、現実に開講されている講義の数が多岐にわたる文学の授業が意識から完全に欠落していることには、言葉に窮した。言葉の運用面を高めるだけなら、日本語学校に行けばいい、彼らの目的と国文学科の目指すところとは根本的に違うのではないかという考えが頭を離れなかった。

異動で短大地域総合科学科に来て、立場が逆転し、今度は留学生を大学へと送り出す立場になった。ここでも志望理由の指導などで同じような質問をするが、結果は同じである。それは、文学系の授業が少なく、どんなことをするのかわからないからというより、やって何のメリットがあるのかというのが大きな原因であるようだ。確かに、大学入学や就職の指標として日本留学試験や日本語能力試験の点数を使うため、留学生は日本語の習得には必死になる。しかし文学を学ぶことには目に見えた実利はない。最近では、自分の興味のあることには一所懸命がんばるが、そうでないことには全くがんばらない、所謂オタク系の留学生が増えた。講義中、自分のやりたいことをして、講義を聴いていない学生が散見されるようになったが、特に、「文学」は、興味を持つ学生が少ない科目のようである。

学生の集中度は低く、表現技術系の私の授業ではありえない、学生の内職を叱る機会が増えた。文学部では、日本語学を研究する留学生は内省ができないため、コーパスや文学作品を使つての日本語研究が多い。しかし、それもあくまで、言葉の用例として用いているのであって、文学作品の内容に立ち入るものではない。したがって、人によっては短大・大学を通じて文学を理解しないまま卒業していくことになる。果たしてこれでいいのだろうか。

(2) 限られた短い時間で、文学研究の基本を一カリキュラムと学生の進路について—  
本科では講義の中心をビジネス、観光においている。したがって、開講されている文学関係の授業は少ない。これは、本科に限ったことではなく、日本文学系の学科を除く、ほとんどの短大に共通するのではなかろうか。もちろん、本科は総合学科であり、通訳・翻訳関係の授業を展開しているので、他大学に比して文学に触れる機会はまだまだ多く、授業で文学作品を扱うこともあるが、それは、あくまで正しい日本語の翻訳・通訳のための、日本語の勉強に主眼を置いた授業である。

また、進路指導系の授業で文学作品を紹介することもあるが、きわめて時間数は少ない。したがって、まとまって文学教育のできる機会が私の担当する1科目の半分、7時間ほどしかない。短大生に「文学」を教えることになって初めて、その教育機会の少なさとその知識のなさに驚いた。これでは、「文学」を学ぶ意味や方法などわかるはずがない。

一方で、日本語・日本文学系の学科への編入学を希望する留学生は意外と多い。留学時点での目的意識が強くないためであろう、本科でも、多彩な方面への編入学希望が見られる。たとえば、今回、私の担当した学年を例にとると、大学進学希望者18名中5名（不合格で帰国した2名を除く）が本学国際言語・文化学科、日本語・日本文学コースに進学しており、また、これまでも、常に、学年の1/5～1/3ほどが日本語・日本文学系の学科への進学を希望していた。彼らは入学後2年間で多くの文学の講義を受けることになり、中には文学で卒業論文を書く学生もいる。これらの学生に、ある程度、文学研究の基礎について教育しておく必要が本科にはあると思われる。もちろん、わずか1科目で定着できるという問題ではないので、日本語教育や表現技術などの近接領域の科目担当者と連携を取りつつ、体系的に行っていく必要があるだろう。これは日本人学生とは違って、留学生に限って、特に考慮しなければならない点である。

### (3) 文学を利用した日本語教育の方法論からの示唆

「1. はじめに」では、短大においては、「現場担当者」としての、自発的な「人間発見」を目指すべきだという見理論文や、「文学研究者」として体験による学生の自発的な活動を促すことを提案する跡上、助川両氏の発表の示す、「体験」による「人間」理解の方向が、短大における文学教育のあり方として望ましいと述べた。

そのような「文学教育」を可能とする方法とは何であろうか。私の知る限り、文学部で行わ

れている、学生にレジメを用意させ発表させる演習形式が、その準備・発表・反省の過程を通じて文学研究の基本的姿勢を身につける最も有効な方法である。必要な知識もその過程を通じて着実に身につけることができる。しかし、本科では授業に割ける時間が限られているので演習形式は取れない。かといって、通常の講義形式では魅力に欠け、学生が真剣に聞いてくれない。わずかな時間では知識や姿勢が定着しない。うえに、身につけられる知識も限られてくる。

文学教育の方法を模索するそんな私の指標となったのが、新しい日本語教育の方向性を示している、水谷治／李徳奉編「総合的日本語教育を求めて」の方法論である。その4章には〈文学を取り入れた日本語教育〉として6本の論文が紹介されている。

たとえば、その中の一本「小説で学ぶ日本語—少人数授業における中級読解例—」<sup>2)</sup>では、〈読解教材を利用し、文法的な事項を説明、翻訳して、語彙中心のテストをする〉という従来のやり方では授業がマンネリ化することを指摘、学習者全員の参加できる学習者主導形式の授業を試みた例が紹介されている。また、「日本語クラスにおける『俳句ユニット』による俳句指導の試み」<sup>3)</sup>では、俳句を学ぶことで①伝統文化を理解し、②日本語のリズムの学習ができ、③言葉に自覚的になって、④発見・創造・完成の喜びと、⑤鑑賞の喜びが得られ、コミュニケーションの場が広がる、という5つの意義を持つものとして「俳句ユニット」と呼ぶ俳句の創作を中心においた授業を提案している。

上記の乱暴な要約ではわかりにくいかもしれないが、これらの参加型・学習者主導形式の授業の試みは、2で述べたような「文学」軽視の意識を持つ学生を「文学」の世界に引きつける力を持っている。主体的に創作や議論にかかわることで興味もわくし、その学習を通じて日本語の能力を高めることができる。

また、このような学習者主導形式の授業であれば、単に日本語の学習に終わるのではなく、教材を選ぶことで、留学生にとって「異質なもの」(たとえば日本人固有の発想)や人類普遍

の「崇高なもの」(たとえば母の愛など)との出会いを教員が演出できる。その読解=疑似体験から、前節で述べた「人間理解」、自発的な「人間発見」を引き出すことが可能となる。

さらには、演習形式と同じ学習者主導形式であるため、(2)で述べたような文学研究の基礎を身につけ定着させることができそうである。文学研究の基礎とは、端的に言えば正確な作品の読み取りとその上に立つ作品理解である。日本語教育の方法論に従って、対象の文章の日本語の正しい理解を行い、そのうえに、「作者は何を表現しようとしているのか」という考察を加えることで、それは可能である。そして、作品について議論したり、表現について相談したりする中で、必ず根拠を指摘させるように注意すれば、研究に最も必要な実証的な態度を身につけることができる。何より創作を通じて作者の視点に立って考えることができる。膨大な日本文学の基礎的な知識は一朝一夕につけることはできないが、このような基本的姿勢だけならば、短期間であっても反復することで養成することができると考えた。

もともと、これは単に日本語・日本文学系学部への進学を考えている学生のみに必要な能力でない。全ての学生において、自ら考え抜き、仲間と語り合い、創作という表現に踏み出していく、という手順を通じ、経済産業省のいう、社会人基礎力、就業力につながる人間力を育てることになる。これは留学生とて例外ではない。

よって、短大留学生の文学教育の形態としては、上述のような文学作品の読解・創作を少人数で行う授業に、文学研究的観点からの工夫をくわえた形が最適だと考えた。

では、このような意図で授業を組むとしたら何を教材とするのが最適であろうか。それについて、より深く考えるため、今期、文学に対する意識調査を中心に、本科に在学する学生のうち52名にアンケートをとった。その結果と分析について次に述べておきたい。

#### 4. 短大生(留学生)の「日本文学」に対する意識

##### (1) 少ない読書体験、読書時間について

日本に来る前に、日本の文学作品を読んだことがあるかどうか、また、読んだならば、日本語か、母国語かについて調査した。また、日本に来てからはどうかについても質問した。結果は以下の通りである。

##### 日本の文学作品を読んだことがありますか

- a. 母国にて日本語で読んだ 1名(2%) ※1
- b. 母国にて母国語で読んだ 17名(33%) ※2
- c. 母国では読んでいない 34名(65%)

##### 日本に来てから日本の文学作品を読んだことがありますか

- d. 日本語の作品を読んだことがある 10名(19%)
- e. 日本語の文学作品を読んだことがない。42名(81%) ※3

- ※1 作品：芥川龍之介「羅生門」1名 ただし、ここを選んでいるもののうち「火影」(漫画)、「菊と刀」(翻訳)と書いたもの2名はcに入れた。
- ※2 作品：川端康成「雪国」3名 芥川龍之介「瑣事」1名、夏目漱石「吾輩は猫である」1名、「三国志」1名 西尾維新1名。ただし、「ドラゴンボール」(漫画)と書いたものはcに入れた。「三国志」は漫画か小説か判断ができませんので、ここに残した。
- ※3 山田詠美1名 山岡荘八「織田信長」1名 太宰治「走れメロス」1名 同「人間失格」1名 「恋空」1名 村上春樹「ノルウェーの森」1名 ただし、「ホテル経営教本」と書いた1名はeに入れた。

上記※1～※3を見ていただくとわかるが、まだ、文学作品という概念が定着していない学生すら一部にいる。日本文学を読んだことのある

学生は3人に1人で、ほぼ母国語で読んでいる(母国語で読んだとしている学生17名中、10名は作品名を覚えていない)。日本に来てからも、日本語で日本の文学作品を読んだ学生は5人に1人、少なくとも、留学生の日本文学作品に対する関心が薄いことは明らかである。

なお、アンケートには読書量を聞く設問もあったが、無回答や不可能な数値の回答が多く、ここでは概略を示すにとどめる。母国ではどのくらい書物を読みましたかという質問に対し、月2冊以上が10名(2冊が8名)、1冊が18名、0冊が6名で、後は無回答であった。平均して月に1冊程度の読書量と考えられる。日本に来た後は2冊以上が2名(2冊が1名)、1冊が9名であり、3名が微増(+1から2冊)しているものの、後は、みな軒並み下がっている。微増した3名が日本語の本を100%としているのが、日本語の学習の必要性に迫られてと予測されるのに対し、他は無回答を除くといずれも50%以下(9名)であることから、もともと読書の習慣があまりなく、来日後は日本語というハードルが高くて、さらに文学作品は読まなくなっている留学生像が見て取れる。

日本の文学作品をほとんど読んでいない学生に作品を読ませることは、先述のように日本人の発想や日本文化という「異質なもの」を疑似体験することで日本人を理解することにつながり、また、日本でも母国でも共通する「崇高なもの」の疑似体験から「人間」を考えることにつながるだろう。その意義は大きいと考えられる。ただし、学生には、日本語能力や基礎知識、読書体験に大きな格差があるので、その理解しやすさと長さ、必要となる知識の少なさに考慮する必要がある。

##### (2) 興味の乏しさから来る知識の定着度の低さ

短く、理解しやすい教材としては韻文がある。だが、日本人でも小説以上になじみがないのが現状である。留学生においてはどうかであろうか。

そこで、韻文分野では、まず、詩、俳句、短

歌について、見たことがあるかについて質問した。また短歌、俳句については、その形式について知っているかを確認した。結果は次の通りである。なお、私の講義では、短歌、俳句を必ず扱っているため、その履修者19名を除いた33名、履修者19名でそれぞれ数えた数値を参考までに挙げておく。

表1 詩・俳句・短歌を見たことがある

	詩	短歌	俳句
履修前(33名)	6 (18%)	6 (18%)	12 (39%)
履修後(19名)	7 (37%)	10 (53%)	12 (63%)
全体(52名)	13 (25%)	16 (31%)	24 (46%)

表2 短歌・俳句の形式がかける

	短歌の形式が書ける	俳句の形式が書ける
履修前(33名)	1 (3%)	4 (12%)
履修後(19名)	7 (37%)	8 (42%)
全体(52名)	8 (15%)	12 (23%)

表1を見ると、韻文に接した経験があるものは、俳句が全体の半数近くであるものの、短歌、詩についてはほぼ1/3～1/4と認知度が低い。短歌に比べ、俳句の数が多いのは、一部学生が日本語学習時に使用するテキストに含まれているためだろう。

授業の履修者19名とそれ以外の学生33名を見比べると、当然のことながら数値はかなり違う。しかし、授業中に短歌と俳句で数時間講義しているにもかかわらず、覚えている者が過半数、補助的に紹介した詩については、わずかに記憶に残っている程度で印象は薄い。

また、見たことがあると答えた学生でも、表2を見ると、その形式(57577,575)を答えられたものは少なく、授業で確認したにもかかわらず、履修者の定着度は低い。もちろん、この数字の中には、入学前、入学後の他の学習で知識を持っているものがあるだろうから、実際には、授業で定着した数値はさらに低いと考えられる。

ただし、短歌・俳句の形式を知っているものと履修者との相関関係を見ると、履修者で短歌

のみ形式を答えたものが1名、俳句のみ答えたものが4名で、6名は短歌・俳句の両方を答えている。未習者がそれぞれ、0名、1名、0名であるのと比べると、俳句の知識は授業で定着した感が強い。

これらの数値の低さには、韻文分野に対する興味のなさが関係していると考えられる。日本の詩に対して興味がありますか?という問いに対し、16名のみ(既習者8/19、42%、未習者8/33、24%)が興味があると答えた。これは、全体の1/3以下(31%)である。なお、興味を持っている既習者8名のうち、俳句・短歌の形式を両方答えているのが5名、片方が無回答または間違いが2名。両方答えていないものが1名であるのに対し、未習者8名は両方答えたのが1名、片方答えたのが1名のみと非常に少ない。ここから、興味と知識について強い相関関係が見られる。当たり前のことだが興味を持って学習しないと知識は定着しない、ということである。詩歌が短く分かりやすい教材であるとしても、興味を持つ工夫をしないと定着しない。その点、創作という方法は、興味の喚起という点で期待が持てるのである。

### (3) 限られた読書体験の範囲

日本文学に関する読書体験を調べるため、作家の名前をランダムに並べ、読んだことがある作家に印を入れさせ、その認知度を確認した。私が大学で教鞭をとっていた頃から今に至るまで、文学教育担当者の間では、留学生の文学に関する基礎知識のなさが問題となっている。国文学科時代には、それによる授業内容の質の低下を危惧し、これに対応するため、日本人と混在する授業の前に、その知識や研究態度における一般的日本人学生との差を埋めるべく、基礎的な科目を設定していた。

しかし現在、そのような科目は存在しておらず、本学でも留学生に最初から日本人と同じレベルが要求される。また、他大学でそのような配慮がなされているかは寡聞にして知らない。3年編入にたえうる知識を彼らが持っているか

どうかを知りたかったのである。

なお、日本人作家の作品との比較のため、作家リスト中に魯迅の名を置いた。被験者52名中、49名(97%)が中国籍であるので、どれくらい母国作家と差が出るか見たかったのである。学生は36名(69%)が魯迅の作品を読んだことがあると答え、これが読んだことのある作家としてはやはり一番多かった。これを頭に置いて、以下の数値を見ていただきたい。

表3 (明治～大正期)

坪内逍遙	夏目漱石	森鷗外
1 (2%)	25 (48%)	1 (2%)

※二葉亭四迷、樋口一葉、島崎藤村は0名

表4 (大正～昭和期)

芥川龍之介	志賀直哉	菊池寛	中島敦	太宰治
18(35%)	1 (2%)	2 (4%)	1 (2%)	6 (12%)

※梶井基次郎、坂口安吾は0名 川端康成は講義の対象なので除く

表5 (昭和～平成期)

大江健三郎	村上春樹
5 (10%)	22 (42%)

※安岡章太郎、吉本ばななは0名

表3～表5を見ていただくと、海外で人気の村上春樹、国内外で有名な漱石、芥川を除くと、他の作家はほとんど誰も知らないという状況で、時代的偏りはない。一人で7作家にするしをつけたものが2名、6作家につけたものが2名いるが、印のないものが9名、平均すると2.3名であって、授業などで経験する有名作家の作品以外、ほとんど小説は読んでいないという傾向が見られる。

また、韻文分野ではこの傾向はさらにきびしく、比較的有名な詩人や歌人、俳人の名前を10名挙げて調査を行ったが、萩原朔太郎、斎藤茂吉、宮沢賢治に同一人が印をつけているだけで、残りはすべて0名であった。留学生の読書体験は総量が少ない上に、有名作家の作品、それもわずかな作家の散文に限られている、というのが現状である。

以上をふまえ考えると、短い本文の中に、日本的な異質なもののや、人類に共通する崇高なものを含んでいる韻文は、学習の負担が少なく、認知度が低いため、学習の意義は大きい。

#### (4) 授業外の時間の過ごし方について

最後に、彼らの一週間の時間の使い方について、アンケートをとってみた。放課後、彼らがいいたい何に時間を費やしているのか、その意識と時間について調査をしたかったからである。時間の記載は個人によって数値に偏りが大きく、週単位でないかと思われるような数値もあったため、単純に平均で判断するのは危険だが、一応、一般的な傾向が見られるので、参考までにあげておく。

表6 あなたはこれらをよく見ますか(聞きますか)

	よく見る/聴く	たまに見る/聴く	あまり見ない/聴かない
音楽	34 (65%)	13 (25%)	5 (10%)
アニメ	31 (60%)	20 (38%)	1 (2%)
映画・ドラマ	28 (54%)	19 (37%)	5 (10%)

表7 一週間に使う時間の平均

週合計52.7 (一日平均7.5) 時間中

読書	漫画	音楽	アニメ	映画・ドラマ	アルバイト	勉強
4.9	2.4	5.8	4.94	3.9	15.7	15.1

表7を見る限り、アルバイトに時間を割かれながらも、留学生は、ほぼ同等の勉強時間を確保して学習していることがわかる。それ以外の時間の過ごし方については、読書に漫画を加えての合計7.4時間に対し、アニメ、映画・ドラマの合計約9時間と映像文化が上回り、音楽の約6時間を含め、ここには、留学生の間にも活字離れが進んでいる傾向が見られる。

今回、日本語を勉強しようと思ったきっかけとしてアニメを挙げる学生が多かったため、漫画、アニメをそれぞれ、読書、映画・ドラマとはっきり区別をつけてアンケートをとった。表6で調査している意識では、「あまり見ない」が少ないものの、映画、ドラマとあまり差がない。しかし、表7に挙げた、実際の平均時間を

見ると、彼らの生活の中に占める漫画・アニメの比率は高く、その影響力の強さを確認した。

アニメや映画を教材として用いることには批判もあるが、学生の興味を引き、導入に用いるという点では有効である。また、やさしい日本語で学習の難易度を下げるという点でも有効だという印象を受けた。短歌は言葉自体は優しく、また短いので、このような気質の学生に受け入れられるのではないかと考えた。

## 5. 短歌を使った授業実践の意義と目標

前項までに述べてきたことは、ある程度、日常の中で予測していたことであるが、これらのことを踏まえて、今年度の授業に改善を加えた。その実践について最後に述べていきたい。

短大赴任以来、私は「文学」の授業において、必ず、俳句、短歌を教材としてきた。前節で見たように、留学生の読書体験は乏しく、文学作品に対する興味関心は低い。知識も限られた範囲で狭く、少なく、定着していない。

また、各人の日本語能力や基礎知識に差があるため、たとえば、小説教材等の長文読解を試みると、主対象となる日本語レベルの学生以外がつまらないと感じたり、わからなくて授業放棄する危険が高い。

しかも、もともと読書意欲が希薄で、自宅での読書・学習時間が少ない留学生である。たとえば、いくら興味があるからといっても、村上春樹の「ノルウェイの森」や夏目漱石の「こころ」を読んで来いと言っても無理なのである。また、小説の授業はどうしても講義主体となるため、学生からのフィードバックが取りにくい。

そこで、短文であり、すぐその場で読める（家庭学習を必要としない）教材、また、学生とのコミュニケーションをとりながら、じっくり読みこんでいける教材として使ってきた。

ただし、俳句や短歌には、文学的表現があり、象徴性も高いので、わからない、難しいという声も多く聴く。そのため、従来は一連の「日本一短い母への手紙」の試み<sup>4)</sup>やTV番組

として放映されている「三行ラブレター」<sup>5)</sup>を紹介し、素直な言葉で気持ちを表現すること、それを感じ取ることを導入として、読解を中心に行ってきた。俳句、短歌や補助教材に書かれた人間理解をよみとることが、学生の人格形成の一助となってくればという思いもあった。

今回のアンケートの結果を見ても、基本的な考えは変わらないので、その方向性は変わらないが、日本語教育で使われる、学習者主導形式を導入し、授業にいくつかの変更を加えた。

その際、参考にさせていただいたのが、1節で紹介した近藤有美氏の発表である。氏の発表は「助詞一つをもなおざりにできない特徴を持つ短歌を用いることにより、日本語の助詞や語彙についての知識を深めることを目的とする」授業の紹介であった。日本語能力試験N1取得者でも、卒業して何年もたっても、留学生は助詞をうまく扱えないことが多い。短歌の授業を通じて、それを学ぶことの意義は大きい。また、短歌は、字数が少なく、象徴性の強い俳句に対し、心情を素直に表現する傾向が強い。そのため短歌は心情を理解しやすい。文学研究が必要となる、作品からの作者の心情の読み取りが容易にできるだろう。

近藤氏の試みは、中級から上級レベルの韓国人大学生（3、4年生）40名を対象に15週にわたって行われたものであり、40名中38名が、その実践により日本語能力が伸びたと評価したそうである。方法的としてはグループ学習を主体に、短歌の解釈活動とその発表を繰り返すものであり、最後に、自作の短歌とその解釈文を一冊の本としてまとめ、出版されている<sup>6)</sup>。日本語レベル、受講者数、学習期間など本学と事情は異なるので、そのまま実施することはできないが、発表後の質問などでお聞きした、「学生同士に話をさせることで、学生同士が助け合い、日本語レベルの格差から来る教育の難しさがある程度解消される」という指摘、「あえて作品の日本語は直さず、学生の自主性に任せた」という姿勢は今回の授業改善に非常に参考になった。

変更点は2点である。短歌の鑑賞で、学生主導の部分を増やした。具体的にいうと、学生同士で話し合うことを許可し、むしろ推奨した。時間も少なく、また、日本語の学習ではなく、文学の学習なので、どうしてもこちらが説明することが多くなるが、質問を中心に、自分で考え、話し合うことに時間を割いた。次に、創作とその推敲に3時間をかけ、創作体験を主とした。

このような変更はどのようなことを可能にするのだろうか。短歌を使った授業実践で、何を目指すことができるだろうか。

まずは、日本語教育分野の先達の試みの中から拾ってみよう。前述「日本語クラスにおける『俳句ユニット』による俳句指導の試み」で杉山純子は、先行研究を含めつつ、俳句学習は以下の5項目の意義を持つ、と提示している。

- 1) 学習者の日本の伝統文化に対する求知心を満たすことができる。
- 2) 俳句を通して、日本語の拍のリズムを学ぶことができる(上迫1992、佐藤1995)。
- 3) 五七五の中に自己表現を凝縮させるということから、ことばに対してより鋭敏に、かつ、自覚的になる。
- 4) 俳句を作ることによって、発見のよろこび、創造のよろこび、完成のよろこびが得られる(鷹羽1976)。
- 5) 人の作った作品を鑑賞するよろこび(黒田1997)が得られ、俳句を通じてコミュニケーションの場が広がる(小林1991)。

ここにあげられた5つの項目は、そっくりそのまま「短歌」の学習の中でも可能であろう。他の4つの意義も学生の向学心を向上させ、学習の定着に役立つだろうが、特に3)が文学鑑賞・研究の両面からは重要である。

また、近藤氏の試みからは、上記の5項目に加え、以下の2項目を付け加えることができる。

- 6) 製本された成果物を手にする達成感、充実感を得られる。(杉山の4)より強いよろこびがある
- 7) 教員と学生、学生同士の話を通じ、議論する力をつけられる。

後者は、議論や相談の際、常に根拠を示すという態度をとらせることで実証的な態度を育てることにつながる。2節では本科留学生特有の問題として、文学部進学希望者の文学研究の基礎能力向上をあげたが、ゼミ・演習形式に顕著なように、文学作品を題材に議論しながら読んでいくというのは基礎能力向上に対して非常に有効な手段なのである。また、議論を通じて深く読める力をつけることは、すべての学生の間力向上に有益であり、より深く文学作品の中の「崇高なもの」とかかわり、より深い人間理解を可能とする。よって、次の意義を新たに見出すことができる。

- 8) 文学研究の基礎的な知識や基本的な態度(実証、比較など)が身につく。
- 9) 深い人間理解を得ることができる。その発見を他者に発信できる。

これらの意義のうち、特に3)、8)、9)を重点目標とし、授業を設定した。すなわち、

- A) 自己表現による「言葉に対する鋭敏さの養成」
- B) 「文学研究の基礎力養成」
- C) 「人間理解」

を目的とした学習行動を必ず1時間の中に入れ、繰り返すことで、その定着を図ったのである。定着には反復が必要である。そこで従来2時間程度だった韻文の時間を、最大限の7時間に広げて使うこととした。その内訳は次章の通りである。次章では、順に、上記の目標を取り入れた授業内容・授業風景を具体的に紹介していく。

## 6. 詩歌を使った授業の実践と課題

- (1) 日本文学、日本の詩歌の歴史と種類についての説明

オリエンテーションとして以下を述べる。

- 1) 日本語・日本文学系の学科の学習内容。特に語学と文学のちがいについて
- 2) 大まかな日本文学の歴史と、文学作品の分類について
- 3) 俳句、短歌の形式や決まりについて

講義全体のオリエンテーションとして、大まかな日本文学の歴史と、文学作品の分類について解説する。漫画や教本を文学作品ととらえるような間違いを正すとともに、日本語・日本文学系の学科の中で学ぶべき内容を概観した。「文学教育」は単なる一般教養としての〈文学概論〉であってはならないという、見理論文の意見と矛盾するようだが、やはり、常識的なラインは押さえておく必要があるだろう。

ただし、切れ字や季語などについては簡単な説明にとどめた。知識を覚えることよりも、体験から、上記重点目標 A) B) C) を体得してもらいたいからである。言い換えれば、言葉にこだわって深く内容を理解し (A)、作者の心情を考え、作者が何を表現したいかを考える、という作業 (B) を通じて、普遍的な「人間」(や日本人) を発見、理解し、表現すること (C) に専念させたいからである。この行程は文学研究のもっとも単純な形であり、今回の試みは、日本語教育の方法の上に、この行程 (A-C) を上乘せし、繰り返すことで、その定着をはかったものである。

(2) 俳句の鑑賞 —イメージを膨らませて読む、イメージの重なりを感じる—

俳句は三句(参考としてさらに一句)に絞り、学生同士、自由に話し合わせた。ただ、慣れていないこともあって、話がすぐに止まってしまうので、教員がポイントとなることを質問し、また、指摘しながら進めた。

提示した俳句は以下の三句である。

- A 目に青葉山ほととぎす初鰯
  - B 古池や蛙飛び込む水の音
  - C 秋の灯にひらがなばかり母のふみ
- 参考 秋の灯にひらがなばかり母へふみ

A の句では、正確なイメージをイメージの重なりで表現することを学ばせた。それは悲しい、つらいなどの心情をそのまま書いてしまう、いわゆる「腰折れ」を防ぐためでもあった。「扇風機・アイスクリーム・蚊取り線香」など

と、一人で言葉を3つ並べて雰囲気を与えよう、3人が別々の言葉を書いて一つの俳句を作ろうというお遊びに、学生は指折りながら参加してくれた。その行為を見ていて、5音と7音から構成される日本語のリズムも十分に体感することができたと考えている。

B の句では、「作者はどこにいますか」「なぜ古池の近くにいますか」「作者が言いたかったのは何でしょう」と作品から作者について思いをはせることを中心に質問をし、考えさせた。「蛙は何匹飛び込んだでしょうか」の質問には、最初、たくさん、5、6匹などと答えるものもいたが、「作者が言いたかったのは何でしょう」の解説の後には、あたりが静寂なので1匹という理解に達したようである。日本語を正しく理解するだけでなく、その上に立ち、文学的な解釈を行っていくことで、文学作品を正しく理解することが出来る方向性を示すことが出来たと確信している。

C の句では、「なぜ平仮名なのでしょう」「お母さんが平仮名で書くのはどんな気持ちでしょう」「平仮名で書かれたお母さんの手紙を読んでいる人はどんな人で、何をしています、どう感じているでしょう」という3つの大質問を順に少しずつ補助質問とともに提示し、考えさせた。そのことで、母と子の愛情という「崇高なもの」に触れさせ、人間について考えさせることができたと思っている。できるなら、お母さんをテーマに作文をさせたかったが、時間がなく、「日本一短い母への手紙」から、数編紹介し解説するにとどめた。作文ほど自分に引き寄せて考えられなかったとは思いますが、母と子という永遠のテーマについて、作品の中からの「人間」の発見や理解の場を提供できたと思う。

3つの句を教材に、順に、イメージ、リズムといった、言葉に対する鋭敏さを養成し (A)、作者の視点を論じる文学研究の基礎的姿勢を身につけ (B)、文学作品のテーマを考えさせることにより、人間「理解」を試みた (C)。

(3) 短歌の鑑賞 —短歌に現れた人の気持ち  
俵万智と与謝野晶子—

3時間目は、俵万智と彼女の訳した与謝野晶子の「みだれ髪」を教材として用いた。それぞれの言葉や時代背景、当時の価値観などの基礎知識を理解し (A)、同じ恋愛の歌でも作者の思いはずいぶん違うということを二人の歌を並べることで鮮明にして「比較」の大切さを学び (B)、明治と昭和の愛のかたちを自らに引き寄せて考えて話し合わせることで、男女の愛というテーマで人間理解 (C) を試みた。

(4) 短歌創作の試み

4時間目は創作を試みた。近藤氏が編集・出版した「サラン・愛し君へ」<sup>6)</sup>の中から、想像力を喚起する句を選び、紹介した。同世代の韓国人の作品なので、みな興味深く見ていた。それぞれの歌には自作解説がついているが、それはすぐには見せず、まず自分で考えさせた。たとえば、次の歌である。

「もう、終わり…」後ろ姿に告げる別れ、  
そう…この背中が大好きだった

「『…』があるのとないのではどう違いますか」「後ろ姿なのはなぜ」「今二人はどこにいますか」「なぜ終わりなのでしょう」などの質問を軸に、細かい表現の意味 (A) とそこにこめられた作者の思いを読み取り (B)、自分ならどう書くか考えさせた。その上で、自作解説を読ませ、そんな思いがここにはあったんだと、人間発見 (C) の機会を作った。

予定では、そのことを踏まえて、それぞれの人間理解 (C) を表現させたかったが、やはり、大半の学生はすぐには書けず、次週までに作成してくることとした。

短歌作家を疑似体験することは、作者の視点に立つことである。これは、作家研究に必要な視点であるが、ただ作品を読むだけではなかなか身につかない。体験によって、それが身につくことを期待した。

(5) 推敲 (2時間)

前週、前々週に、他者の作品でやったことを、この時間は自分達の作品で行った。さすがに、授業への関心や集中力は高い。仲間との相談を主にしながら、教師が机間指導しながら、一人ひとりの作品に指摘や質問を重ね、(A) (B) (C) の行程を体験できるよう授業を行った。

この言葉からはこんな想像をするというと、えーという悲鳴が上がり、なんていえばいいかわからない、と普段の姿からは想像できない悩み顔を見せる。言葉を選ぶ苦しみを感じている

(A) ことが体感できた。また、創作した作品の中身を、「私はこう思った」と表現するところに、自分の問題として (作家の立場から) 考えられていること (B) も実感できた。学生の作品を見ながら、「あう」にも「会う、合う、逢う、遭う」と漢字がたくさんあるが、どれがいいと思う、ひらがなのままやカタカナで書くのもいいよ、などと間接的にアドバイスすると、電子辞書を片手に必死に考える。

創作は日本語学習としても有効だが、文学を学ぶという点においても有効である。この方法は今期の履修者の数が少ないから可能であったことだが、今後の指導の指標となった。

(6) 作品の製本、提示

最後の時間は、作品をワープロで打ち、小冊子にして、全員に配った。「かっこいいと思います」など好評で、近藤氏のように正式に製本されたものではないけれど、ただ作品を作っただけではなく、達成感、充実感が強い。また、これが最終版ではない、書き直すためにもう一度考えるよ、と校正の話をし、自らの作品を教材に、作品はメモに始まって、創作ノート、草稿、初稿、初刊と形を変えていくことを講義、また、その行程を検証するとこんなことがわかる、と、芥川を引いての作品論 (成立論) についても触れることができた。概論ではなく、自分たちの体験を通すことで、授業内容の定着がはかれたと考えている。

## 7. おわりに

以上の行程を通じて、目標は達成できたであろうか。以下に検証をして、論を終えたい。

杉山論文の1)日本の伝統文化に対する求知心 2)日本語の拍のリズム 4)発見、創造、完成のよろこび、5)鑑賞するよろこび、コミュニケーションの広がりについては、ここまでの授業風景と学生の作品を見てもらえば、おおむね、達成できたと考えてよかろう。また、近藤氏の発表から新たに見出した意義、6)成果物を手にする達成感や学生への反響から得られたと確信するが、7)教員と学生、学生同士の話を通じ、議論する力をつけることは、不十分であった。これは、時間の少なさや、そういう形態の授業法になれてないためである。これは一朝一夕にどうこうできる問題ではなく、今後、他の科目とも連携をとりつつ、引き続き検討していきたい。

(A)(B)(C)の重点目標については、授業内容のところで述べてきたように、授業への主体的参加により、(A)鋭敏な言語感覚については身につけられたと考える。(B)については、結果としては、判断が難しいが、身についたものもあれば、身につかなかったものもあり、まだまだ方法の検討が必要と思われる。

短大文学教育の目指す最終目的として設定した(C)深い人間理解とその表現については、わずかな時間でもあり、成功したとはいいがたい。しかし、少なくとも、彼女らの作品を見る限りでは、その方向に向けて動き出す契機は作ることができたと思う。

これら、特に今回、日本語教育の方法の上に工夫として付け加えたABCの部分定着しているか、いないかを判断するのは、アンケートもあるが、学生が作った作品によるのが一番いいと思う。最後に学生の作品をいくつかあげてみよう。

白い部屋衣を縫う手霞んだ目

どこにいても忘れないこと

夢みたい一年ぶりに彼に逢う

飛行機の中目を閉じて待つ

作品に自らつけた解説を見るとまだまだおかしな日本語だが、この歌だけを見ると、十分に学習内容を理解し、自分の人間理解を表現できていると思う。前者は「白い部屋」「衣を縫う」「霞んだ目」とイメージを重ねることで老母のイメージを構築し、「どこにいても忘れない」母の愛と感謝という、崇高なものを表現できている。後者は「一年ぶり」「飛行機」「目を閉じて待つ」とイメージを重ねることで、遠距離恋愛のイメージを構築し、久しぶりに恋人に会う喜びという崇高なものが表現できている。

なお、紙面の関係でここには載せないが、彼女らがつけた解説を見ると、作品を詳しく言い直しているだけのものが多く、細かい表現にこういう意味をこめました、という解説はほとんどない。そういう書き方をしなさいと言わなかったのが失敗であった。後者の作品を例にあげると、「遠距離にいるから、なかなか逢えない彼がすぐ見えて、夢みたい感じがある」という程度で、比較や実証といった、論理的な展開が理解、定着できたかは疑わしい。

短大の留学生教育の一つの方法として、ここまで、短歌創作を中心とした授業について述べてきたが、研究はまだ端緒についたばかりである。つたない活動について報告するとともに、実践内容が幾分かでも参考になれば願いつつ、論を終える。

## 参考文献

- 1) 見理文周、「一つの文学教育試論—短大保育科のために—」、1977、「駒沢女子大学研究紀要」11, 43-58
- 2) 尹福姫、「小説で学ぶ日本語—少人数授業における中級読解例—」、2002、水谷修・李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』、国書刊行会、318-328

- 3) 杉山純子、「日本語クラスにおける『俳句ユニット』による俳句指導の試み」、2002.、水谷修・李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』、国書刊行会、287-302
- 4) 丸岡町文化振興事業団編、『日本一短い母への手紙』、2010、中央経済社  
福井県丸岡町の碑文からヒントを得て、1993年（平成5年）から行われている一筆啓上賞の作品をまとめたもの。現在は、「母」の部分を「父、家族、愛、友、私」とする類書や「一筆啓上 喜怒哀楽」「一筆啓上 大切ないのち」など、たくさん類書が発行されている。漫画や中国語版があるので、日本語能力に格差があっても、教材としても扱いやすい。
- 5) 「3行ラブレター読む！深イイ話Ⅱ」2011、日テレBOOKS
- 6) 近藤有美編、「サラン・愛し君へ」（啓明大学校国際学大学 日本語学科学学生歌集）2008、中文出版社